



Title	記憶の遺失物：何でもないことを突然思い出さなくてはならなくなったとき
Author(s)	仲, 真紀子
Citation	心理学ワールド, 創刊準備号, 17-22
Issue Date	1998-01-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44694
Type	article
Note	特集: 記憶
File Information	PW1998_17-22.pdf



[Instructions for use](#)

特集

記憶

記憶の遺失物

何でもないことを突然思い出さなくてはならなくなったとき

仲 真紀子

大切なリュックをなくしたこと

8月のある日、私は数日間、旅行に出るつもりで新宿に向かった。あずさの自由席に乗るために少し早くホームに並び、ふと気がつくとき背中リュックがない。中央線の車内の棚に上げたままショルダーバッグだけを持って降りてしまったのだ。うちひしがれて駅員室に向かった。

「中央線の電車にリュックを忘れました。」

「今の時間、電車は数分間隔で来るからね。44分だったか48分だったか、それとも52分？」

「……。」

「じゃ、どこ行きの電車でしたか？」

「……。」

頼れるものは自分の記憶しかないというのに何も答えられない。教室で立たされた小学生の心境だ。

「高尾行き？ 三鷹？ 豊田？ 武蔵小金井？ 青梅や河辺というのものもあるけど。」

車内で「……小金井……」というアナウンスを聞いたような気がした。妹の家の近くだと思ったのだ。

「そう、武蔵小金井行きだと思います！ 車内で小金井と言ったのを聞きました！」 濡れかけた者が木片でも見つけたように、私は叫んだ。

だがその電車からはリュックは出てこなかった。私は旅行を取りやめ、遺失物の手続きをして家に戻った。その夜、東京駅から電話があった。高尾行きの電車で見つかったということだ

った。

私は洗面道具をしまったんでしょうか？

この出来事から数週間経った頃、私は家族と一緒に夫の実家に行った。翌日、私は用があって実家から都内へと出かけ、残りの家族が私の衣類や洗面道具を持って帰ってくれることになっていた。ところが都内に向かう途中で、家族に頼んだ荷物の中に洗面道具を入れたかどうか、心配になってしまった。顔を洗った後、バッグを開け洗面道具を入れた気がする。しかし洗面道具を洗面台にポンと置いて、そのまま家を出てきてしまったような気もする。どちらのイメージも鮮明に描くことができる……。

とうとう途中下車し公衆電話をかけると義母が出た。

「あの、私、バッグに洗面道具入れたんでしょうか？」

「え？ 誰がどの洗面道具をどこに入れたって？」

「あの、私が私の洗面道具を自分のバッグに入れたかどうかなんですけど。」

我ながら情けない質問だ。

「出がけに入れたかどうか自信がなくなってしまってます。」

義母はすぐに見に行ってくれた。「入ってたわよ。」

洗面道具をバッグに入れたイメージと入れなかったイメージ。入れた方のイメージで記憶の空白を埋め、私は一応安心した。



なか まきこ

千葉大学助教授。

福岡県出身。

1984年 お茶の水女子大学大学院博士課程人間文化研究科中退，同大助手。

1987年 学術博士（お茶の水女子大学）。

1987年 千葉大学講師。

1989年 同大学助教授，現在に至る。

専門は，認知心理学，発達心理学（日常記憶・目撃証言，対話における語彙獲得など）。

記憶の錯誤

リーズン (Reason, J.T., 1984) という人が日常の記憶の錯誤を調べている。この論文を読むと次から次へと似たような事例があげられており，私だけが例外ではないと励まされる(?)。日常のルーチンは自動化され意識の割り当てが少ない。そのため，はっと気づくとそれまでのことが思い出せないというのはよくあることらしい。

リーズンは集めた事例をもとに，行動や記憶の錯誤，注意のコントロールの失敗などに関する個人の傾向性を測定する尺度SIML (表1) を

つくった (Reason, 1993)。この尺度は15項目を自己評定するだけなので，授業で記憶の錯誤を扱うときなど，導入に用いることもできる。方法は，過去1年間に各項目の内容がおおよそどの程度の頻度で生じたかを，5段階（1：全くない，2：たまにある，3：よくある，4：頻繁にある，5：いつもある）で評定するというものである。「1：全くない」を1点，「2：たまにある」を2点というようにスコア化し，合計をSIML得点とする。リーズンの基準データ (N=1,656) によれば，SIML得点の平均は30 (SD=7.1) で，各項目の平均は1.3~2.6である。授業のデモンストレーションでも同様のスコア

表1 SIML : Short Inventory of Memory Lapses (Reason, 1993)

1. 言いかけたことを忘れる。
2. 今、あるいは後でやろうとしたことが思い出せない。
3. 考えたくないことが頭から離れない。
4. 我に返ると、それまで何をしていたか、どこをやってきたか思い出せない (たとえば、歩いているときや車を運転しているとき)。
5. 必要な手順を抜かしてしまう (たとえば、お茶を入れるのに、茶葉を入れずにお湯を注ぐなど)。
6. よく知っている人、場所、物の名前がすぐに出てこない。
7. 注意を向けているつもりで、実は注意していない (たとえば、本を読んでいるときやテレビを見ているときに)。
8. 何かしに行ったのにすることを忘れて「私はここに何をしに来たのだろうか」という感覚をもつ。
9. 同じことを繰り返したり、必要のないことをしたりする (たとえば、部屋に入るとき、昼間なのに電気のスイッチを入れるなど)。
10. しようとしたことを忘れる。
11. 何かしかけていたのに、いつの間にか横道にそれ、他のことをやっている。
12. 今置いたもの、あるいは身につけているものを探す。
13. 何かしていて、邪魔が入ったとき、前にやろうとしていたことを思い出せない。
14. 注意を集中させなければならないときに他のことを考えてしまう。
15. 行動は正しいのだが対象 (相手) が違うというような間違いをする。(たとえば、キャンディーの包み紙をとって包み紙を口に入れ、キャンディーをごみ箱に捨てるなど)。

が得られる。どんな人でもこういうことが「たまにある」のだろうか。

ふだんの活動の記憶

さて、リュックがないことに気づく、洗面道具をしまったかどうか不安になるというように、自動化された行為から突然引き戻される時、私たちはふだんの行動の記憶がいかに希薄であるかを知る。忘れ物や入れ忘れなら社会的責任はないが、以前、日大の巖島氏や慶應大の伊東氏らと共同研究をした目撃証言の事例では、ある店員が日常の業務でたまたま品物を売った客が刑事事件の被疑者となった(Naka, Itsukusima, & Itoh, 1996; 仲, 1996)。日常の行動が突然重要な意味をもち、想起が求められるとき、人は何をどのように思い出すのだろうか。

一般的知識からの推論

まず第1に、一般的な知識からあり得そうなことを推論するということがあげられるだろう。詳細を想起できないとき、私たちは一般的な知識、あり得そうなことによってギャップを埋める。パークレイとウエルマン(Barclay, C.R., & Wellman, H.M., 1986)による興味深い実験を紹介しよう。彼らは6人の大学院生に2か月間毎日3つ以上、その日の出来事を記録してもらった。これらの出来事をどの程度思い出せるか、3か月おきに最長2年半まで想起させる。いわば日記につけた出来事の想起であるから、まったく自動化された行動の記憶とはいえないかもしれないが、ふだんの出来事の記憶であることには違いない。この実験の面白いところは、再生テストではなく再認テストを用いていることである。再認テストの項目には①被験者が実際に体験した出来事、②被験者が体験した出来事の細部を変えたもの、③他の院生が体験した出来事(つまり被験者本人は体験していない出来事)が含まれていた。

結果を図1に示す。実際に体験した出来事の再認率は100%に近いが、細部を変えた出来事は1か月後、すでに50%以上が「体験した」と誤再認されている。また、なんと他人の体験まで

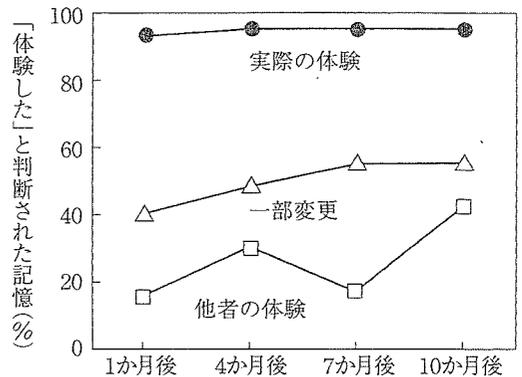


図1 出来事の再認 (Barclay & Wellman, 1986を改変)

もが「体験した」と誤再認される。1か月後は15%、4か月後は30%、10か月後は40%以上の誤再認率である。被験者は同じ大学に通う同年代の院生であり、生活パターンも類似している。そのため他者の体験も自分が行い得ることの範ちゅうにあり、誤再認されたのだろうとパークレイらは解釈している。大学院生の生活という一般的知識から推論された事柄が再認されたといってもよいだろう。

被暗示性：对人的圧力と誤情報効果

第2に、外から与えられる情報が本来の記憶に混入し、想起されるということが考えられる。グドジョンソン(Gudjonsson, G.H., 1984; 1987)は面接や質問によって与えられる情報が本来の記憶に取り込まれてしまう傾向性を被暗示性と定義し、その源泉として2つの要因を区別した。第1は对人的な圧力であり、これによって生じる記憶の変容をシフト(shift: 変遷)と呼ぶ。日常生活で、それまであまり意識しなかったことを突然思い出すよう告げられる場合、それはたいへん重要な事柄であり、思い出せるかどうか本人や社会の利害に大きく関わる。そのために「質問に答えられさえすれば問題は解決する」、「『分からない、知らない』と言うと非協力的だとか頭が悪いと思われるかもしれない」、「何度も繰り返し尋ねられるのは、私の答えが違っているからではないか」、「私が覚えていないことでも相手がわざわざ聞いてくるからには、そういうことが実際にあったのかもしれない」と

いった圧力が生じる。それが被暗示性を高め、わずかなヒントでも取り入れ記憶を再構成しようとする態勢をつくり出してしまうと考えられている。

グドジョンソンは個人の被暗示性を測定する方法としてGSSを作成した。これは物語を聞かせた後、誘導的な内容を含む質問を行い、その後「誤りが多いのでやり直して下さい」と教示し、再度同じ質問に答えてもらうというものである。最初の回答とやり直し後の回答の変化(最初は「はい」と答えたのに2度目には「いいえ」に変わるなど)が对人的圧力による変遷としてカウントされる。筆者はGSSの平行版(Gudjonsson, 1987)を70名の大学生に行ったが、変遷率は20%であり、繰り返しを求めるだけでも「想起」に変化が生じることが確認された(仲, 印刷中)。

さて、グドジョンソンがあげている被暗示性のもう一つの要因は、質問等に含まれる誤情報が記憶に混入してしまうというものである。これをイールド(yield: 影響の受けやすさ)という。ロフトス(Loftus, E.F.)は数多くの実験で、誤情報の効果——たとえばスパナを使って押し入った強盗について、目撃者に「強盗がハンマーで押し入ったのは何時頃でしたか?」と問うと(焦点は「何時」だが、ハンマーが誤情報として入っている)、目撃者はスパナとハンマーを混同してしまいやすい等——を検証している(Loftus, 1982等)。GSSは誘導的な質問への反応によってイールドを測る。筆者の被験者では、約10%の間に対しイールドが生じた。

偽りの記憶

第3に、積極的なイメージ化や推測の繰り返しが疑似記憶を形成するという「偽りの記憶」があげられよう。私は洗面道具をめぐってあれこれとイメージし、どれがぴったりにくるか努めて考えようとした。だが繰り返して考えると、どれが本物の記憶でどれが単なるイメージなのか分からなくなってくる。

近年、親や親戚から性的虐待を受けたという「記憶」がセラピーの過程で回復するという事

例が欧米を中心に広がっている。その何割かは訴訟にもち込まれるが、検討の結果、セラピーで想起されたのは「偽りの記憶」であった(つまり虐待はなかった)ことが判明するケースも多い(日本では高橋, 1997のレビューがある)。「偽りの記憶」がつくり出されることを示す実験は蓄積しつつあり、たとえばロフトスらはショッピング街で迷子になったという「記憶」を、ハイマン(Hyman, I.E.)らは結婚披露宴でパンチ・ボウルをひっくり返したという「記憶」を、またスパノス(Spanos, N.P.)らは乳児期、ベビーベッドの上に鮮やかなモビールがかかっていたという「記憶」を、被験者に植えつけている(Loftus, 1997)。

このような記憶の形成には①何かを思い出すよう圧力をかけること、②その「出来事」について繰り返しイメージを喚起するよう求めること、③イメージが偽である可能性を追究しないこと、そして④たとえば「誰々もそれが事実だと言っている」等、補強証拠を与えることなどが重要な要因だという(Loftus, 1997)。また、⑤思い出せないけれど確かに何かあったはずだという信念が関わっているという研究者もいる(Roediger & McDermott, 1997)。

これらの「偽りの記憶」研究は過去にさかのぼる幼児期の記憶、それも外傷的な体験の記憶の植えつけを問題にしている。だが同じような要因が保持期間のより短い日常記憶の想起にも影響を及ぼす可能性はないだろうか。たとえば目撃証言が争点となっている刑事事件を見返してみると、多くの事件において、目撃者は数時間から数か月前に体験した(当時は)何でもなかった出来事を、何度も何度も繰り返し尋ねられる(仲, 1997)。繰り返される質問や尋問の中で上の①~⑤のような要因が「偽りの記憶」をつくり出してしまう可能性は否定できない。

現在進行中の研究を紹介する。私の研究室で横山が卒業研究の一環として行っているもので、卑近な日常の体験について「偽りの記憶」が形成されるかどうかを検討している。方法は実験者とその知人が共有している数か月から1年前の日常の出来事について面接し質問するという

表2 なかった出来事に対する反応

1 回目の面接	
実験者:	あなたと私はどんな反応をしましたか?
被験者:	うーん、「だいたいぶ、だいたいぶ」、そんな感じ。
実験者:	その場にはほかに誰いましたか?
被験者:	あー誰が、Aさんかな?
実験者:	あなたは、あー見てない見てないと言いました。私はそれに合わせて、「だいたいぶ、だいたいぶ」などと言っていましたが、実は自分のことで一生懸命であり気にとめていませんでした。その場にいたのはあなたと私とBさんだけでした。
被験者:	あーそうか。
実験者:	思い出した?
被験者:	うんうん。
2 回めの面接	
実験者:	あなたと私はどんな反応をしましたか?
被験者:	うーん、こちらを見てない。
実験者:	では、その場にいたのは誰でしたか、ほかには?
被験者:	いたのは、Aさんがいたかな? いないかな。
実験者:	そんな感じですか?
被験者:	そんな感じ。

ものである。10の出来事について「いつ、どうした」または「どこで、どうした」という簡単な記述を与え、この記述以外の「どこで」、「いつ」、「他に誰が」、「前後の出来事」などの詳細を尋ねる。これらの出来事は実験者がこの実験に備え記録しておいたもので、6つは真、4つは偽である。実験の被験者は10人。同じ出来事について2〜3週間ごとに3回面接を行う。なお面接の前と後に「記憶の程度」を5段階で評定してもらう。

偽りの出来事に関するある被験者の反応を表2に示す。食物を落としたという出来事だが、個人情報も含むので想起の様子が伝わる程度に改変してある。実際にはなかった出来事なのに被験者は「うんうん」と思い出したかのような口調である。

同じ被験者が10の出来事に対して評定した「記憶の程度」を図2に示す(上述の「食物を落とした」は10番目、右端の出来事である)。真の出来事の評定に比べ、偽りの出来事の評定は低い。だが面接を重ねるうちに上がってきているようにも見える。

面接を繰り返すと「偽りの記憶」は増加するのか? 「そうだ」とする結果がある一方、「そうでもない」とする結果もある(Roediger et al.,

1997)。「偽りの記憶」が形成されるメカニズムとしては、①初期の面接でイメージした事柄が記憶され、ソースモニタリングの失敗が生じる(つまりイメージしたことの記憶なのか、実際の記憶なのか、情報のソース=源泉が分からなくなる)や、②親近性の誤帰属(何度も繰り返してイメージしているとそのイメージが身近に感じられるようになるが、そんなに身近に感じられるのは、その出来事を実際に体験したからに違いないと誤って判断する)などが考えられる。これらの説によれば、「偽りの記憶」は想起を繰り返すたびに増加することが予想されるが、実際のところどうなのか、さらなる研究が必要で

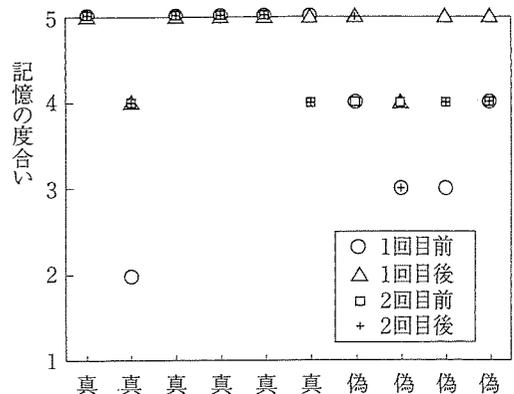


図2 記憶の度合い

ある。

なお「偽りの記憶」の形成には被験者をだますという倫理的問題が関わっており、実験には細心の注意を要する。本研究も出来事や被験者の選定等、実験者と筆者とで相当の配慮をした。実験終了後のデブリーフィング（実験の意図を明かし、結果の説明などを行う）も重要だと認識している。

以上、本稿では日常のちょっとした出来事が突然重要な意味をもつようになり、想起せねばならなくなったとき、人は何をどのように想起するのかということについて考察した。特に一般的な知識からの推論、他者からの圧力と誤情報効果、そして偽りの記憶の形成という観点からアプローチしたが、まだまだフィールドでの研究は不足している。今後の発展に期待したい。

引用文献

- Barclay, C.R., & Wellman, H.M. 1986 Accuracies and inaccuracies in autobiographical memories. *Journal of Memory and Language*, 25, 93-103.
- Ceci, S.J., Leichtman, M.D., & Gordon, B.N. 1995 The suggestibility of children's eyewitness reports: Methodological issues. In F.E. Weinert & W. Schneider (Eds.), *Memory performance and competencies: Issues in growth and development*. New Jersey: LEA. Pp. 323-347.
- Gudjonsson, G.H. 1984 A new scale of interrogative suggestibility. *Personality and Individual Differences*, 5(3), 303-314.
- Gudjonsson, G.H. 1987 A Parallel form of the Gudjonsson Suggestibility Scale. *British Journal of Criminal Psychology*, 26, 215-221.
- Hyman, I.E., Jr., Husband, T.H., & Billings, F.J. 1995 False memories of childhood experiences. *Applied Cognitive Psychology*, 9, 181-197.
- Loftus, E.F. 1982 Memory and its distortions. In A.G. Kraut (Ed.), *The G. Stanley Hall Lecture Series*, Vol. 2, Washington, D.C.: American Psychological Association. Pp. 119-154.
- E. ロフタス 仲真紀子(訳) 1997 偽りの記憶を作る 日経サイエンス12月号
- (Loftus, E.F. 1997 Creating False Memories. *Scientific American* (September), 72-77.)
- Loftus, E.F., Coan, J.A., & Pickrell, J.E. 1996 Manufacturing false memories using bits of reality. In L. Reder (Ed.), *Implicit memory and metacognition*. Hillsdale, N.J.: Erlbaum.
- Loftus, E.F., Feldman, J., & Dashiell, R. 1995 The reality of illusory memories. In D.L. Schacter, J.T. Coyle, G.D. Fischbach, M.M. Mesulam, & L. E. Sullivan (Eds.), *Memory distortion: How minds, brains, and societies reconstruct the past*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Loftus, E.F., & Ketcham, K. 1994 *The myth of repressed memory*. New York: St. Martin's Press.
- 仲真紀子 1997 「見たこと」は信頼できるか：目撃証言 海保(編)「温かい認知」の心理学 金子書房 Pp. 243-260.
- 仲真紀子 1996 客の顔の記憶——問屋業店員の証言 現代のエスプリ, 350, 156-162.
- 仲真紀子 (印刷中) 偽りの記憶と諸尺度——被暗示性尺度 (GSS, CIS) と解離体験尺度 (DES) ——千葉大学教育学部研究紀要, 46(1)
- Naka, M., Itsukushima, Y., & Itoh, Y. 1996 Eyewitness testimony after three months: A field study on memory for an incident in everyday life. *Japanese Psychological Research*, 37(1), 14-23.
- Reason, J.T. 1984 Lapses of attention. In R. Parasuraman & R. Davies (Eds.), *Varieties of attention*. New York: Academic Press. Pp. 515-549.
- Reason, J.T. 1993 Self-report questionnaires in cognitive psychology: Have they delivered the goods? In A. Baddeley & L. Weiskrantz (Eds.), *Attention: Selection, awareness, and control*. Oxford: Clarendon Press. Pp. 406-423.
- Roediger, H.L., & McDermott, K.B. 1997 Recovery of true and false memories: Paradoxical effects of repeated testing. In L.M. Goff & M. A. Conway (Eds.), *Recovered memories and false memories*. Oxford: Oxford Univ. Press. Pp. 118-149.
- Siegel, M. 1996 Conversation and cognition. In R. Gelman & T.K. Au (Eds.), *Perceptual and Cognitive Development*. San Diego: Academic Press. Pp. 243-282.
- 高橋雅延 1997 偽りの性的虐待の記憶をめぐって 聖心女子大学論叢, 89, 91-114.